

## 中日姓名の比較について：親族の血縁性と社会性

著者	李 卓
会議概要（会議名，開催地，会期，主催者等）	会議名：日文研フォーラム，開催地：国際交流基金京都支部，会期：2001年4月10日，主催者：国際日本文化研究センター
ページ	1-33
発行年	2001-09-01
その他の言語のタイトル	A comparison between Chinese and Japanese names : consanguinity and sociality of relatives
シリーズ	日文研フォーラム ； 138
URL	<a href="http://doi.org/10.15055/00005678">http://doi.org/10.15055/00005678</a>

第138回 日文研フォーラム



# 中日姓名の比較について

—親族の血縁性と社会性—

A Comparison between Chinese and Japanese Names  
—Consanguinity and Sociality of Relatives—



李 卓

LI Zhuo

---

国際日本文化研究センター



日文研フォーラムは、国際日本文化研究センターの創設にあたり、一九八七年に開設された事業の一つであります。その主な目的は海外の日本研究者と日本の研究者との交流を促進することにあります。

研究という人間の営みは、フォーマルな活動のみで成り立っているわけではなく、たまたま顔を出した会や、お茶を飲みながらの議論や情報交換などが貴重な契機になることがしばしばあります。このフォーラムはそのような契機を生み出すことを願い、様々な研究者が自由なテーマで話が出来るように、文字どおりインフォーマルな「広場」を提供しようとするものです。

このフォーラムの報告書の公刊を機として、皆様の日文研フォーラムへのご理解が深まりますことを祈念いたしております。

国際日本文化研究センター

所長 山折 哲雄





● テーマ ●

# 中日姓名の比較について

—親族の血縁性と社会性—

A Comparison between Chinese and Japanese Names  
—Consanguinity and Sociality of Relatives—

● 発表者 ●

李 卓

LI Zhuo

南開大学 教授

Professor, Nankai University, China

国際日本文化研究センター 客員教授

Visiting Professor, Int'l Research Center for Japanese Studies



2001年4月10日 (火)

## 発表者紹介

李 卓

LI Zhuo

南開大学教授

Professor, Nankai University, China

国際日本文化研究センター客員教授

Visiting Professor, International Research Center for Japanese Studies

### (職歴)

1982年 2 月	中国・南開大学歴史学部卒業
1985年 7 月	南開大学歴史学修士
1992年12月	同大学歴史研究所助教授
1997年 7 月	同大学歴史学博士
1998年 7 月	同大学歴史研究所教授
2000年 1 月	同大学日本研究センター教授
2000年10月～2001年 9 月	国際日本文化研究センター客員教授

### (主な著書)

『家族制度と日本の近代化』	単著	1997	天津人民出版社
『日本文化研究—中日文化比較を中心として』	共編	1998	中国社会科学出版社
『家族文化と伝統文化—中日比較研究』	共著	2000	天津人民出版社
『日本における二回の世紀に跨る改革』	共著	2000	天津社会科学院出版社
『中国人の日本史研究』	共著	2000	世界知識出版社

### (主な論文)

「明治民法論争からみた近代日本の家族制度」	単著	1992	『天津社会科学』
「伝統的な家族制度と日本人の家観念」	単著	1993	『世界歴史』
「家督相続制と近代日本経済の発展」	単著	1996	『世界歴史』
「養子の制と近代日本企業の発展」	単著	1998	『日本学刊』
「戦後日本家族制度の改革」	単著	1998	『南開学報』
「中日財産継承制比較について」	単著	1999	『日本学刊』

## はじめに

姓名は現代社会に生活する人がひとしく持つ特定の呼称である。人は生まれるとまもなく自分の姓と持ち名を与えられ、それをもって社会生活に入り、それによって自己を代表し他人と区別される。簡単に言えば、それは人の「符号」である。中国人の姓名と日本人のそれは比較的接近していて、姓を名前の先に置くという基本形式を持っているが、ただ、両者は接近しているとはいえ、その差異は大いにある。

中日両国の姓の最大の違いは数値上の問題である。つまるところ、一億二千万の人口の日本でいくつの姓氏があるか。一九八三年、群馬県太田市在住の七十二歳の老人齋藤清氏はもつとも直接的な——全国各地の電話帳を逐一調査するという方法を用いて統計し、日本人の姓氏は一三九、一六三であるという結果を出した。さらに、一九九六年、日本の姓名学の研究者丹羽基二氏編纂の『日本苗字大辞典』（芳文館）では、収録した姓氏は二六一、二二九に達する。

では、人口世界一の中国にはどのくらいの姓氏があるか。宋代から始まって今に伝わっている姓氏の専門書『百家姓』に収録された姓氏は五〇四個（単漢字四四四、複漢字六〇）である。一九九六年、古代から現代までの各民族が用いた漢字表記の姓氏を統計

整理した『中華姓氏大辞典』（袁義達、杜若甫著、教育科学出版社）には今まで最も多い数字の一一、九六九の姓氏が収められた。しかし、ここにいう一万余の姓氏のうちには、古代のもので今日使用されてはいないものも多く含まれる。実は漢字姓氏を使っている中国人の常用する姓がだいたい三千前後である。そのうち全人口の九四％を占める漢民族人口の常用姓氏は五百個前後にすぎない。

日本はなぜこのように人口のわりに姓氏が多く、中国は少ないのか。両国はなぜこのような違いを生んだのか。これは中日両国の姓の成り立ち、姓の内包するもの、および両国の文化伝統と直接の關係を持つものである。

### 一 日本人の国民皆姓と中国人の皆有姓について

身分、等級制度がきわめて厳格であつた封建時代にあつては、庶民階層は職業、婚姻、衣食住、立ち居ふるまいなど各面で厳しい規制を受けた。徳川幕府は一八〇一（享和元）年、法律をもつて百姓の苗字帯刀を禁止し、苗字は武士などの身分の特権を示すものであつた。大多数の庶民は「名なしの権兵衛」の言葉が示すように苗字がなかった。ある学者の考証では、明治初年、全国で苗字をもつ戸数は、わずか六％前後に過ぎなかつた。明治維新後、新政府は「四民平等」の方針を貫徹するため、同時に徴兵・徴税・戸籍の登

記を行なう必要のため、一八七〇（明治三）年九月、太政官布告「自今平民苗字被差許候事」を發布した。しかし、苗字のない生活になってしまった農民の多くは、恐れ入ってしまい、なすことを知らなかったので、苗字を称することに熱心でなかった。そして、一八七五（明治八）年二月、ふたたび太政官布告を發布して、国民全員に必ず自分の苗字を持つよう要求し、苗字を公称とすることを国民の義務とした。そうすると、百姓たちは村の役人や教養人、寺の和尚に自分の姓を付けるよう頼んだ。あつという間に、居住地や職業、各種の事情から生まれた姓氏が国中を覆いつくした。当時の状況を石井研堂の『明治事物起原』ではこういう<sup>2</sup>。

当時、著者の父は、町の仕長といふを勤めたりしが、区内細民の請に応じ、苗字を選びてやりしことを、微かに記憶せり、即ち種々の苗字を選び尽くして後煎茶の銘を取りて、甲に青柳乙に喜撰丙丁鷹爪宇治といふ様に命じ、茶銘尽きて、徳川四天王の酒井榊原井伊本多など命けしに、その内の一人、恐るゝ「彼様な勿体ない苗字を付けましても、お上から御咎は無いでせうか」と訝り問ひ、父が、必ず心配無き由を論じたりき、今にして回顧すれば、これ予が十一歳の時なりしならん。

この法令が平民百姓には名前だけあつて苗字がない歴史を徹底的に終わらせることになった。姓はこの時から「人の符号」としての意義を持つてすべての家々に入つていたのである。いわば、国民皆姓もまた明治維新の成果のひとつといえよう。しかし、苗字を作るに当たつてなんの制限もなかった、つまりきわめて大きな随意性があるのはその時の突出した特徴である。大まかにいえば、これが日本に姓が多くなつた根本的な原因の一つである。

中国の歴史上の姓氏も、かつては貴賤を分ける政治的、社会的機能を持つていたが、それは早く消滅した。二千年前、中国はすでに皆が姓をもつ歴史に入つていた。そしてみんなが姓をもつのは、姓氏合一から始まつたのである。

今よく言われている「姓氏」という言葉は、もともとの姓と氏を二つの部分に分けたのである。原始時代の群婚制が發展して血縁関係を指標とする族外婚制になつたとき、直接の血縁関係の有無を識別する必要があつて、それで血縁関係の称号——姓が生まれた。母系制社会は女性を本位としてゐるから、中国最古の姓は「姬」、「姚」、「姜」、「嬴」「好」、「姁」、「妊」などの女偏の文字である。姓は部族血縁の指標として生まれ、ただ血縁関係を区別する生物的功能はあつたことが分かる。のちに子孫が繁栄し人口が多くなり、移動・逃亡などさまざまな原因で一部族から分岐して支族が生まれ、これら支族

の名称が「氏」と呼ばれるようになった。たとえば商族の人の姓は「子」であつて、のちに「殷」、「宋」などの氏が分岐したのである。

「氏」発生の過程で、ようやく男子が生活上の主導的位置につくと世系上も父系血統で数えるようになる。だから氏は父系制の形成にしたがつて生まれたものである。姓と氏の関係は大木と枝であり、姓は大木の、氏は枝の名称である。氏の誕生は実際には氏族社会解体の象徴である。氏の発生ののち、姓は血縁関係を表すことによって「別婚姻」のために用いられ、もっぱら女性が使った。氏は社会的地位の指標であるから男性についてさらに重要で、社会的交渉の場では男性はたがいに関手方の氏を呼び合つたのである。それで「三代以前、姓氏分而為二、男子称氏、婦人称姓」（三代前に姓氏が分かれ、男子は氏、婦人は姓を称する）<sup>3</sup>という言い方がある。

姓は血縁関係の区分を表すのだが、氏はそれと異なり、「氏所以別貴賤、貴者有氏、賤者有名无氏」（氏は貴賤の別を現わす、貴者に氏あり、賤者には名ばかりで氏はない）<sup>4</sup>。氏は、はなから政治的機能を賦与されていたのである。『左伝』の記載によると、魯の隠公八年（紀元前七一五年）「天子建德、因生以賜姓、胙之土而命之氏」、すなわち、周の天子は功德のあるものを分封し、出生すなわち血縁関係によって姓称を、そしてその封土によって氏称を賜つたのである。貴族たちは国名・住所・地名・封土・官職・爵



位・諡号・技能などによって氏の呼称を得たのである。だから貴族にのみ氏があった。このような「賜姓名氏」制度の存在により、西周時代は中国姓氏の大発展期となった。この時生まれた氏の名は、後に中国の姓氏の重要な来源に発展していく。

周代の分封体制および氏をもつて貴賤の別をあきらかにするやり方は、日本の徳川時代に似ているが、それはすぐに變化した。春秋時代、中国の歴史は大變革期に入り、分封制は瓦解し、嫡長子繼承を基礎とする「世卿世祿制」は徐々に廢止され、従来の氏は存在の基礎が失われてしまう。動亂期に生まれたのは、才をたのみに勃興した新貴族層で、もともと氏をもたない平民が混亂に乗じてかつてに氏をたてたもので、以前の氏はすでに社会的地位を表示しつづけることはできなくなった。いわば姓はもちろん氏をもつてしても家族の標記としてはともかく、貴賤を分けるものとしての機能は萎縮し、姓と氏がいつしよになっていくのは必然の勢いとなった。戰国末期、「秦滅六国、子孫皆為庶民、或以國為姓、或以姓為氏、或以氏為氏」（秦六國を滅ぼす、子孫をみな庶民とし、あるいは國をもつて姓とし、あるいは姓をもつて氏とし、あるいは氏をもつて氏とす<sup>5</sup>）となつて姓氏合一の過程は加速する。司馬遷が『史記』を著した時期は姓と氏とはすでに一体となつていたから、のちに「姓氏之稱、自太史公始混而為一」（姓氏の稱は、太史公よりいりまじつてひとつになった）という人がいた<sup>6</sup>。古來の姓も新來の氏も完全

に一体になり、姓というようになったのである。この後は、姓すなわち氏、氏すなわち姓となり、姓氏の別はなくなる。氏の背負っていた政治的使命は終わり、貴族が独占した姓氏の特権も消え、この後は皇帝から百姓に至るまでみな姓をもち、生まれればこれを具え、富貴貧賤を問わなくなったのである。これは中国姓氏発展史上の根本的変化であつた。

姓氏合一になつてから、中国姓氏の構造は固定された。とくに漢民族のほとんどの姓氏は秦漢以前の「氏」から来ている。宋人編集の『百家姓』は姓五百余を集めているが、そのほとんどが漢以前から使用がはじまつたもので、漢以前の文献からは探し出せないものは五〇前後にすぎない。姓氏の合一はすでに二千年を経て、王朝の交替、民族の融合とともに、あるものは消滅し、あるものは新しく生まれた。しかし、全体としては中国の姓氏は基本的に大きな変化はなかつたといえよう。

## 二 中国姓の血縁的特性

秦漢時代に姓と氏が合わさつてひとつとなつて以来、中国人が宗族制度を重視して、血縁關係を擁護したことは、中国の姓氏が二千年安定して続いた根本的原因であると思う。中国人の姓氏についての考えはおもに三つある。

まず、姓は人の出生・世系の標識であるということ。姓は「女」と「生」とからなる。許慎『説文解字』には、「姓、人所生也」（姓は人の生まれである）としている。女子が生んだところを姓とするという意味である。「姓者生也、以此為祖、令之相生、雖不及百世、而此姓不改」（姓は生であり、これを祖とし、これをあい生じせしめ、百世に及ばずといえどもこの姓を改めず）。姓は「生」から作られたものであり、人は出生して姓があるのであり、生まれをもって姓としたのである。姓は血縁と出生という純粹に自然な生物的事実を根拠とし、父祖の生命の連続を根拠として確定した称呼となったのである。自分の身上と父系血縁の証拠である。だから姓は祖先の榮耀が凝結した、きわめて神聖なものである。父のところから得た生命は動かざる事実であり、これを否定することはできない。そうすることは自己の本源を否定したことであり、恥辱だと見なされる。中国では「大丈夫行不更名、坐不改姓」（りっぱな男は行なうに名を変えず、坐るに姓を改めない）という諺があり、これを高尚な品行とみなし、これによって男子がことを行なう際の決意表明になった。いまでも、中国人は自分の姓に誓っている。「もしおれがウソをついたならば、おれはもう李という苗字じゃない」。いうなれば、中国人にとって自分の姓氏以上に尊いものはないのである。だから、中国人は昔から自分の姓氏を守ること、非常なものがある。特殊な事情がない限り、一般には姓氏を変えるこ

とはありえないのである。

たとえば、日本のように妻の家に入った婿養子が改姓するとかといったことは少ない。入り婿でも一般には姓氏は変えない。もしも、ある世代が入り婿や引き取られて養育されたなどの原因で姓氏を変えるにいたったとしたら、その子孫は原姓に戻すべく乞い願う。たとえば、明代礼部右侍郎黄觀の父は許家に入贅して許姓に変えたが、黄觀にいたって黄姓への改姓を上奏し、皇帝の允許を得ることがあった。中国人は自己の出身家系に強力な帰属感を持つことが分かる。

女性が結婚以後も実家の姓を放棄しないのはこうした理屈によるのである。中国の古代、女性の地位が低く活動の範囲も狭かったので、女性の名前は「閨名」と言われて、閨房にのみ流通したのである。嫁いではその名はさらに使用されることは少なくなる。一般には劉氏、趙氏のように姓によって呼ばれ、あるいはその姓氏の前に夫の姓をかぶせて、王呉氏、張劉氏のように呼ばれた。たとえ自分の名前が要らなくなったとしても自分の姓だけは失うことなく、姓をもって自己の本源としたのである。

第二、姓は宗族の標識であるということ。宗族とは何か。簡単に言えば「父之党為宗族」（父の党は宗族である）。即ち父系の集団——上は高祖から下は玄孫までの異なった世代（輩分）の組合わさった大家族のことである。中国の家庭は婚姻と血縁の基礎の上

に成り立っている。一人の父親が代表する家庭単位は、何人かの息子が構成する「房」を包括し、各「房」の地位は基本的に平等である。父が亡くなれば各「房」は分家し独立する。そして何年かのちに「房」に新しい「房」が作られていくのである。こうして世々広がり代々分かれ、一人の始祖から始まった家庭は拡張して宗族となるのである。宗族の構成要素は、まず「血の共同」——同一祖先の男系の後代である。次は、一族が集まって住んでいることで、同一村落の人はみな血縁関係を持つ。唐代詩人の白居易は「朱陳村」にこのように書く。

一村唯兩姓、

一村ただ兩姓のみ、

世世為婚姻。

世世婚姻をなす。

親疏居有族、

親疏居るに族あり、

少長游有群。

少長遊びに群ある。

宗族は同じ姓を目印に集まるのだから、そこには姓による心理上の宗族への帰属感がある。もとは見知らぬ人でも顔をあわせれば、親近感が生まれ、ときには、おもわず「五百年前は一家」（おれたちは五百年前はひとつ家のものだった）といってしまうので

ある。

血縁関係は宗族存在の前提であり、族人の宗族や社会における地位と利益は、大きく血縁関係の親疎遠近によって決まるのである。だからこそ家族の世系血統の確認は、血縁関係の混乱を防止する非常に重要なこととなる。一般には、三、四代以内であれば、誰が誰の先祖か子孫かといったことははっきりわかる。しかし、時がたつにつれ族は大きくなり人数はふえ、誰が誰だか覚えにくくなる。血縁関係に混乱が生ずるのを防ぐために、家族世系の繁栄を主に記載した家譜は、このようにして生まれた。人の系統を明らかにし、親疎を解明するのに頼りになるものとして家譜はある。福建安溪の『謝氏家譜』は巻頭に家譜を造る目的についてこういう。

「伝襲世遠、子孫日繁、或叔侄位次高下之倒置、或兄弟名字称呼之重複、家于市井者或不知山林之族属、居于鄉村者或罔識城邑之戚疏、未必不由家譜不足征故也」（子孫の繁栄を世に伝えるのは、おじおいの地位が上下ひっくり返ったり、兄弟の名前に重複がおきたり、あるいは家が市井のものか山林の一族かわからず、村にいるものが町にいる親戚を知らない。それは家譜によるそのいわれを考証しないからである）。

家譜は宗譜、族譜、家乗ともよばれ、宗族の世系と人事を記載したもので、簡単な巻物形式もあり、冊子形式もある。一般的な内容は家系図、家系録、地伝記、家訓、輩行、宗廟、墓地などがある。各家族の経済や教養の程度が異なれば、書かれる内容も詳細の程度も異なってくる。しかし、家系の源流、血縁系統はどの家譜でももつとも基本的な内容である。家譜は一族を長幼の順に依拠して並べており、それは事実上一族の人事について保存書類となっていて、そこに名前が入れば一族として認められたことになるのである。だからよそのものは一族のなかに入ることはできない。いうなれば、異姓の養子、妻の連れ子、贅婿などは家譜に入れないで、血統の純潔を保とうということだ。家譜に入らず、あるいは家譜からその名を除くのは、族規違反や品行の劣悪な族人への懲罰である。生まれて族譜に入らず、死して祖墓に埋葬されないとすれば、「孤魂野鬼」（供養する人もない霊）となり、これは厳しい処分である。

家譜は旧中国では盛んに行われ、史学家の呂思勉は一九二〇年代の『中国制度史』のなかで「至于今日、苟非极僻陋之邦、极衰敝之族、殆无不有譜」（今日に至るまで、ひどく貧しい田舎、衰えきった一族は別として、家譜のないものはほとんどない）と記している。一族の子孫についていえば、家譜を編纂して血縁延長の記録を完璧に維持していくことは、彼らのなすべき重大な義務である。これには、一般には一定の期間があつ

て、たとえば孔府の家譜は、三十年に一度小編集をやり、六十年に一度大編集をやる。もし時期が来たのにそれができないとすると不孝よばわりされる。こうして家譜編纂は家族組織の永久的な事業となるのである。

第三、姓は同姓不婚の標識であるということ。同姓不婚は、古代にあつては重要な婚姻タブーのひとつであつた。周代の礼制ではこれを嚴格に規定している。

『礼記・曲礼』…取妻不取同姓、故買妾不知其姓則卜之（妻は同姓を娶らない、妾を買つて其の姓を知らなければ占う方がいい）。

『礼記・昏義』…婚礼者、将合兩姓之好（婚礼はあわせて二つの姓となるのをよしとする）。

『国語・晋語』…娶妻避其同姓（娶る時は同姓を避ける）。

『左伝・昭公元年』…男女辨姓、礼之大司也（男女姓を見分けるのは、礼官の主な仕事である）。

同姓不婚の原則は、優生上の理由から出ている。姓氏合一の前は姓は同一の血縁集団をあらわしているから、同姓婚姻ならば族内通婚にほかならない。当時すでに近親結婚



の危険性は知られており、「男女同姓、其生不蕃」（男女同姓は子どもが盛んにならない<sup>10</sup>）、  
「同姓不婚、惧不殖也」（同姓は結婚しない、多く生まれないのを恐れるから<sup>11</sup>）、「气同則  
不繼」（気おなじくするはすなわち継がず<sup>12</sup>）などというのはこの理屈からくる。人に姓が  
あるゆえんは、「崇恩愛、厚親親、遠禽獸、別婚姻也」（恩愛を尊び、親親をあつくし、  
禽獸を遠ざけ、婚姻を区別するためである<sup>13</sup>）、こうして同姓を娶らないのはもっとも大  
切な道徳であった。西周の時は、同姓不婚の戒律は嚴格に守られていたが、歴史の発展  
につれて、同姓の人がかならずしも血縁上の関係があるとはかぎらなくなると、同姓不  
婚の原則もだんだんにもとの意味を失ってきた。とはいえ、唐代にも依然として「諸同  
姓為婚者、各徒二年、總麻以上以奸論」（同姓のものと結婚したものはそれぞれ懲役二  
年、總麻以上奸を以って論ずる<sup>14</sup>）という法律があった。けれども「同姓」の概念は変化  
しており、『唐律疏義』の解釈によると、「同宗共姓、皆不得為婚」（同宗で共姓のものは  
すべて結婚することはできない）となっており、婚姻タブーは同姓から同宗に縮小し  
ている。これは清代末期にいたってはっきりした言い方になり、「同姓者重在同宗」（同  
姓は同宗に重なる<sup>15</sup>）となった。つまり、五服<sup>16</sup>内に結婚は禁止される以外、同姓不婚の原  
則が正しいに取り消されたのである。この婚姻タブーは数千年来ずっと人々に嚴格に守ら  
れていて、今でも影響が残っている。一九八〇年発布の「中華人民共和国婚姻法」では、

以上のべたように、中国の姓は個人に附属する呼称であるが、人に父がないものはない以上、姓がないものもないということである。家庭と家族のなかでは同姓同宗の者が作る集合体であった。封建時代の宗族という普遍的な社会組織のなかで、とりわけ血縁関係という生物的要素はなにもものにも替えがたい存在であった。こうした血縁関係の象徴——姓氏は人々の尊重と擁護のもと、代々変らず受け継がれてきたのである。これを軽々しく替えることはできない。たとえば、孔子の後代子孫はすでに八十代となつているが、嫡流支流みな孔姓で

```
graph TD
    subgraph Direct_Blood [直系血親]
        GP1[祖父母] --> P[父]
        GP1 --> M[母]
        P --> Siblings1[兄弟姉妹]
        M --> Siblings1
        Siblings1 --> Children1[兄弟姉妹の子女]
        Children1 --> Grandchildren1[兄弟姉妹の孫子女]
    end

    subgraph Collateral_Blood [傍系血親]
        GP2[外祖母] --> P2[母兄弟姉妹]
        P2 --> Children2[母兄弟姉妹の子女]
        Children2 --> Grandchildren2[母兄弟姉妹の孫子女]
        Grandchildren2 --> GreatGrandchildren2[母兄弟姉妹の曾孫子女]
    end
```

あり、ここに「天下に二孔なし」のいい方がある。とはいえ、姓の変更ができにくいのはもちろんだが、同時に長い歴史と広い国土のことであるから、改名の現象はやはりあるのである。たとえば、皇帝から姓を賜ったとかいうのは臣民としては光栄である。また禍を避けるために改姓するのはやむを得ないところである。しかしこれはまれな事例であって個人の積極的行為ではない。

### 三 日本姓の社会的特性

日本では歴史の上で、姓は苗字といわれる。草木の苗に象徴される家族集団は、子孫後代が苗のように分蘖するのをもつて「苗裔」といったのである。「苗字」は日本古代の社会単位とする「氏」が解体していくにしたがい形成されたもので、大化の改新後、社会の発展に伴って氏の政治機能は徐々に失われ、平安時代に入ると家族を基礎とする小さな集団に分裂してしまった。これら家族集団は官職や職業、居住地をもつて呼ばれるようになる。たとえばもともと藤原氏一族のなかで、木工助の職を世襲したものは工藤、斎宮の頭に任じられたものは斎藤。中央貴族が国司に任命され発展して地方豪族となるや、その支配地の地名を姓とした。遠藤・近藤・伊藤・加藤・後藤などみな藤原氏の族人が国司に任じられてから生まれた新しい苗字である。地方官吏や荘園の荘官も郡

や郷、莊の名前を自分の家族の名としていった。幕府時代に入ってから、武士の分封と転居の関係で苗字の大発展期に入る。庶子の分割相続を中心とする惣領制家族の瓦解と嫡子単独繼承を原則とする家督相続制の形成にともなって、苗字はだんだん人々が尊重するものとなり、近世社会の発展とともに身分の指標となっていく。

封建時代に、苗字はかならずしも個人の呼び名に従属するものではなくって、家名として存在するものとなる。日本人の姓氏の歴史は実に家名の歴史なのである。イエは家業を中心とする家族経済共同体であり、いふなれば、婚姻と血縁を紐帯とする具体的な家庭の上になお「個人の生命を越えて、祖孫一体、永遠の生命体」<sup>17</sup>が存在することとなり、この「永遠の生命体」こそ家が成立することができる根本——家業となるのである。家業という言葉は、中国人の觀念のなかでは、主に動産と不動産といった物質上のものを指す。しかし、日本人の觀念のなかでは、家業の意味には家産が含まれているが、家産が家業のすべてではない。もっと重要なのは技能を指すことである。武士についていえば、家業は武芸を指す。武芸がある武士は封建的関係のなかにくみいれられ、「奉公」を通して生存のための俸禄と榮譽を勝ち得たのである。商家についていえば、家業は先祖伝来の財産のほか、これら財産を蓄積した商品の売買、および商取引の経験が含まれ、とくにそこにはこれらのものを代表する屋号が含まれている。一般の農民では、

代々従事してきた農業とその基礎となる土地をさす。芸能家では、それは主に立家の根本たる歴代うけついできた芸能そのものをさす。

家業の存在は家名の存在をとおして表れてきたものであつて、家名の断絶はすぐさま家業とイエの断絶を意味する。家名に代表されるこういった社会関係は個人の存在によつて確立し維持されるものではなく、先祖伝来の家族の成員の努力の結晶である。だから、中国の姓と日本の家名とは、どちらも同じ呼称をもつて祖先およびその子孫を貫いているのであつて、ともに超時代的連帯感を喚起する役割がある。しかし「日本人は家名によつて、己れの社会地位が祖先の遺業のたまものであることを思つたに對して、中国人は姓によつて、己れの体内にそして同族の体内に——生き続ける祖先の生命を感じたということができるであらう」<sup>18</sup>。

中国人の姓の血縁的特徴に對して、日本人の姓は社会的特徴をもつ。それには主に二つの表現があると思ふ。

家名を重んじ個人を軽んずること。家名は人の身分、地位、榮譽とひとつになり、家長に代表されまた家族の成員が使うことは、光榮あるものである。しかしこの榮譽は、かならずしも家のすべてのメンバーに属さない。だれかがイエを相続できて、はじめて彼と家名とは結びつくのである。これに反しては家名に手をつけることはできない。と

くに家督相続制確立後は、ただ一人（おおかたは長子）が家業と家産と、同時に家名を相続した。次子以下は結婚後分家として長子の本家に属したのである。イエのなかで、日本の長子以外の人は中国の同類の人の幸運には遥かに及ばない。彼らも同じ父母の生命の延長継続であるのに、ただ従属的地位に甘んずる運命が定められている。彼らの直面する不平等は、家産が得られない、あるいは少ないというばかりではない。事情が複雑になると家名ですら使用できないことがある。この例は、歴史上多く見られる。室町幕府將軍家では、家督相続による争いを避けるために嫡子以外のものを僧籍に入れた。足利義詮は豊後の国大友氏に対して、大友の名は能直（大友氏初代）以来総領の号であるから、庶子などがかってに自称することは甚だ理由がないと申し渡した<sup>19</sup>ので、大友家から出た支系は同族でありながら、詫磨・志賀・田原・一万田・戸次・元吉・鷹尾・鹿子木・三池・門司など別の称を名乗っている。江戸幕府を立てた徳川氏は、これを名乗れるものを御三家・御三卿にかぎり、他の族人は松平氏を称することができただけである。商人の三井家も同族各家からの分家は「三井」の家名を使つてはいけ<sup>20</sup>ない規定があるので、三井家では家業の相続と無縁のものには、越後屋とか、泉とかと称した。これらの事実が説明するところは、いわゆる「親子」関係は、血縁の父子に限らない、息子がうまれても当然のように家業と家名を継承する権力を持つわけではない。こうして日

本の同族は同姓ではないし、血縁があっても姓氏が異なる現象は少しも不思議ではないのである。

家業は重く血縁は軽いこと。家名、読んで字の如くイエの呼称である。それはイエに附属しているのであって個人に付いているのではなく、それとの相関関係は家庭の成員の生命的延長ではない。いわゆる「絶家」は、單純に自然的意味での後継ぎが断たれるという意味ではなく、主としてそこにある人々が生存の基礎を失ってしまうことをいうのであって、社会関係の消滅を意味するのである。たとえば、武士が俸禄を取り消され、商家の経営が破産し、農民が土地を失い、芸能家の技芸の後継者がいなくなる、つまりは家業の喪失である。したがって、これは何がなんでも避けなければならない。ここにおいて日本人の家業に対する重視は、血縁伝承の重要性をおおいに軽んじてしまう。血縁関係を重視する中国人からみれば、以下、三つの手法はいかにも理解し難いことである。

第一は、後継ぎを選択するとき、多くの人が中国人のようにには血縁にこだわらないことである。もし自分の息子が能無しであれば血のつながりがないものをも代りにする。たとえば明治時代、東京馬喰町の紙屋中庄家家憲では、うちの息子は分家するか他家に養子に出す、それ以前は使用人同様に使うこと、男子の相続はあとあとまで決してさせ

てはならない。当家の相続は養子に限るといように規定している。<sup>21</sup>

第二は、もしも息子がなければ、養子をするか婿養子を選んで家督の地位を相続させる。これはひろく認められたことで、歴史上、非常に多く行なわれた方法である。家族史研究の専門家湯沢雍彦氏は明治初年の壬申戸籍を分析して、江戸から明治にかけては、男子四人に一人は養子だとしている。<sup>22</sup>なかんずく多いのは婿養子で、妻の家の姓にあらためてごく当たり前に妻の家の家業と家産を継承している。血縁があるかないかに拘泥せず、実際の人の要素を第一におく選抜制度で、あらかじめ子孫に不肖のものが出て家業を衰えさせるのを避けようとするのである。この点は「異姓養わず」という原則を固持する中国人にはやれないことである。

第三はもしも家業が存続すれば、たとえ血縁のないものでも跡取りにして「絶家」を避けることである。二十世紀初め、日本ではちょっとした騒ぎになった「乃木家再興」事件がある。乃木は「軍神」として奉られた乃木希典である。一九二二年九月十三日、明治天皇葬礼の当日、乃木希典は絶家の遺言を残して妻とともに切腹殉死を遂げた。彼の三年祭のとき、乃木の旧藩主毛利子爵家の第二子毛利元智は「乃木家」を再興した。「香火」<sup>23</sup>は断たれているが家名はなお存在する。血縁と家名とどちらを重んずるか。日本人は後者を選ぶ。



他所の人の養子ないしは婿養子になるのは、自分の姓氏をかえることを前提としている。家業と家名の継承のために血縁関係は軽く見られる。日本人のイエを竹にたとえる人がいる。まっすぐ伸びて外側は固いが中身は空っぽで、血のつながりがないという。<sup>24</sup>

家名と家業を重んじ個人と血縁とを軽んずるのは、日本人の姓氏に大きな可変性をもたせた。日本の家名で代表されたのは社会関係であって血縁は直接の関係をもつとは限らない。そこで人々は社会関係が変われば自分の姓氏を変える。たとえば、江戸時代大阪の豪商の鴻池家の祖先是山中なる武将であった。のちに商人となるや、攝津の国鴻池村で酒造に従事し姓を鴻池としたのであった。改姓を通じて自己の家系の美化をはかるのは豊臣秀吉を典型とする。秀吉は政治的軍事的生涯のなかで、勢力を得るにしたがいその家名を変えた。木下からまもなく羽柴（敬慕する丹羽長秀・柴田勝家の一字ずつをとって）にかえ、のちに貴族の姓をとって平秀吉、藤原秀吉と称したこともある。太政大臣に任じられると天皇賜姓の形式をとって豊臣朝臣と称した。これは彼が自分の出身を卑下し（父は足輕）、高貴の家系に対する崇拜を暴露するものであり、姓氏の変更の容易さを示すものでもある。中国人の觀念では、姓が血縁を表す以上、家族個人の盛衰榮枯にはかわりがなく、自己の出身の貧窮をきらい改姓によってより高きにつくことなどは到底許されない。無論、父祖の社会的地位がいかに卑賤であり、彼らの性格にい

かなる欠陥があろうとも、改姓の理由にはなり得ない。

ここにいう日本人の改姓の容易さは当然、封建時代の事情によるものであるから、近代以来国民皆姓、姓名が個人の符号となつてからは、姓名がたえず変ふことは、逆に戸籍管理上不都合なこととなり、一八七二（明治五）年八月二十四日、政府は太政官布告で、国民の姓氏、名前、屋号の更改を禁止した。これをもつて自由改姓の歴史は終わりを告げた。

#### 四 命名形式から見た中日両国の家

見たところ、中国人の姓は單漢字、姓名は三字が多い。日本人の姓は複數漢字、姓名は四字が多くなる。この外に中日間の命名の仕方には大きな違いがあつて、中国人は「輩分排行」（決められた世代の字を使うこと）、日本人は「祖孫連名」を重視する。

中国史上における血親關係の重視、宗族の存在については既述したが、それはさまざまな方法によつて表示され守られる。命名の方式はそのひとつである。同族の人は同じ世代（同輩）では名前のうち一字を同じにすることが多い。この字を輩字、また家族範字といつて、一族の始祖或いは有名人により決められて、族譜のなかに書いてあるのである。だから、昔、中国では姓名は三字から成り、第一字は姓で、第二字は族中の世代

（輩分）のシンボルであり、第三字だけが自分に属する名となる。同世代の人は名前のなかに同じ字を持って、宗族内の世代関係は「輩字」をもつことによって明確に区別される。こうして同一宗族のものは、転居などの原因で知りあっても「輩字」を通して相互の関係が分かる。それによって自分の宗族内の位置も了解できる。その役割は宗族集団の尊卑の序列と人倫関係を維持することにある。たとえば孔子家族が元代から「輩字」を使い始めて、第五十六代から第八十五代まではつぎの三十字である。

希言公彦承 宏聞貞尚行

興毓伝繼広 昭憲慶繁祥

令徳維垂佑 欽紹念顕揚

一九二〇年、第七十六代目衍聖公（嫡孫）孔令貽は、第八十六代から一〇五代までの「輩字」を次のようにきめた。

建道敦安定 懋修肇益常

裕文煥景瑞 永錫世緒昌

現在、台湾に住んでいる孔徳成は孔子の第七十七代目嫡孫であるが、孔子の故郷の山東曲阜で、繁栄の早い支系ではもう八十代目の「佑」の輩になった。もし一世代年齢を二十五年とすると、孔子家族は「昌」の輩に至った時は五百年あまり後ということにな

るだろう。

「輩分排行」制はだいたい宋代に形成され、明代におおいに流行した。帝王将相はもとより平民にまでひろまって、いまでも多くの人がこれを使う。赤ん坊が生まれると、「輩分排行」の字の順にどの世代の人かどの名を使うかがきまってくる。誤りは許されない。「輩字」の乱れは中国社会ではタブー視されてきた。世代の後のものが先の世代の「輩字」を絶対に使ってはならない。農村ではいまでも多くの人々が世代区分を根本とし、家族内部の人倫関係維持の重要な方法と考えている。世代区分がなくなったら家族のなかに、上下の序を失い、まともにもなくなってしまうと考える。だから「輩分排行」の方法は依然としてひろく使われているのである。地方によっては、「輩字」によらずに名前をつけたら、それは家譜のなかにいれないと定めてあるところがある。<sup>25</sup>

「輩分排行」制は、ある文化的現象を反映している。「輩字」をとおして中国人が家族血縁のタテの流れを重視するだけでなく、より多くのヨコの関係が、さらには宗族の広がりを見わけていることがわかる。父系原則によって中国の男子は家族のなかに「房」の地位をもち、自然に家族財産の所有者の一人になる。共同の血縁と平等の経済的地位を持つ家族の同世代の男子はいやおうもなく同じ「輩字」を使うことになるのである。こうして、タテの世系の長さは宗族の歴史の悠久をあらわし、ヨコの世代の広がりには宗

族の繁栄と強大をあらわす。

「輩分排行」の存在は、中国人命名の習慣に大きな影響をもたらした。昔中国では姓名は三字から成るのは、輩字を使ったからである。五四新文化運動と新中国の社会変革をとおして宗族制度は崩壊したが、「輩分排行」はかならずしも排除されたわけではない。農村の多くのところでは「一村唯兩姓」の現象は依然として長期にわたって存在し、農民は依然として伝来の族譜が続くことを願い、過去に定められた「輩字」はずっと使用されることになる。都市では、現代文化の影響と家族の束縛から離れたことなどから家族範字（輩字）は村のように流行していない。しかし、これにかわって家族範字（輩字）の変形とする家庭範字が生まれた。そのために、一九六六年の文化大革命前までは、漢字で名前を表記する人口の九〇％は、三字の名前だった。<sup>26</sup>これからこの状況に根本的変化が生じ、二字名がどっと増えた。原因の一つは文化大革命のなかで、多くの族譜が破壊され、これがまた宗族觀念に強烈な衝撃を与えたからである。このため家族「輩字」の使用が少なくなった。さらに重要なのは、八十年代以来一人っ子政策が進み、家庭範字の意味がなくなってきたことである。統計では、一九八二年までに二字名の人は三二・四九％に達している。<sup>27</sup>二字名が増加してから同名率が高まって生活と社会管理上の不便をもたらした新しい社会問題となっている。たとえば、天津市で「張穎」という人は一九

五五年に五十四人、一九七七年一九七人、一九九〇年に至ると二一三〇人に増加した。<sup>28</sup>二〇〇一年四月三日付けの『天津日報』によると、全市では王偉という人は五八六三人、劉洋というものは四四八三人がある。また四一一人の李莉、三九七六人の劉靜……同姓同名人の増加を見て専門家たちは、複数字の姓を使うか新姓を作って姓名の重複を避けたたり、複数字の名前をつけて個人性を強めるように呼びかけている。前者は中国の伝統に合わないから広がりにくい、後者は中国人の名前の発展方向となるだろう。こうしてみると、歴史上長い間続いた「輩分排行」の命名方法はやはり一定の合理性を持っていたというべきである。

中国人が「輩分排行」を強調するのに対し、日本人はイエの延長継続を重視した。家督相続制のもとでもっとも重視されたのは親子系列のタテのつながりであり、ヨコのそれぞれ世代の家庭との組合せはそれほど緊要ではなかった。日本人が使った命名方法は子孫が祖先と同じ字を継承していくことである。さしあたりこれを「祖孫連名制」としよう。たとえば、江戸幕府十五代の将軍の名前は、つぎのとおりである。

家康	秀忠	家光	家綱	綱吉	家宣	家継	吉宗	家重
家治	家斉	家慶	家定	家茂	慶喜			

この一連の名前の中に大部分は「家」の字がついている。中国人が見たら容易に同一

世代の人物と誤解するであろう。実際には十五代の将軍は輩分から言えば十一世代、時間には二百七十年にもわたっている。

戦前有名な三井財閥は、十七世紀に創業してから財閥解散に至るまで三世紀十一代にわたった。その総領家の歴代家長の名前は、つぎのとおりである。

高利——高平——高房——高美——高清——高裕——高佑——高福——高朗——  
高棟——高公

もし三井家族のことがわかっていない人でなかったら、もしこの家系図をよく説明しなかったら、中国人でこれが「高」字の世代だと思わない人間はいないだろう。たとえば、三井高棟は高朗の弟であったが、彼が長兄の養子になってからは二人は父子の關係になった。日本人には、中国人のような「輩分排行」の意識がないだけではなく、中国人に輩分が乱れ、昭穆<sup>29</sup>に合わないという人倫にとると認められるやり方が正常だということとをよくあらわしている。

こうして日本の家系図は中国の家譜とは異なり、明確な識別性をもち得ない。そこでわかるのはあれこれの個人ではなく、イエ全体の存在である。家業の存在をわからせることが、日本人の姓名の存在意義であって、個人がそのイエのなかでどんな地位を占めているかはそう重要ではない。日本人のこれと相関する習慣は、あれこれの名門大家が

その家系の栄耀栄華を守ろうとして、家名の永世相伝にまでいたり、家名世襲制（襲名制）をとって子々孫々同一名称を継承し第何代と称することである。歌舞伎の名門——成田屋は代々みな「市川団十郎」を名乗り、十八世紀から今日まで一二代を数えている。むかしの大商家もこのようで、たとえば住友家は、家長が「住友吉左衛門」と称し、鴻池家の家長は「鴻池善右衛門」と名乗った。先にふれた三井総領家の家長は代々「高」の字をつけるほか「三井八郎右衛門」を名乗った。こうして彼らのフルネームは「三井八郎右衛門高利」とか、「三井八郎右衛門高平」ということになるのである。こうした現象は祖先の名前がすでに家業の象徴、無形の精神的財産となり、個人は存在したとしても完全にイエのなかに埋没するのである。

## 注

- 1 井戸田博史『「家」に探る苗字となまえ』、雄山閣出版一九八六年版、第三九頁。
- 2 石井研堂『明治事物起原』、『明治文化全集・別巻』、日本評論社一九六九年版、第一四三頁。
- 3 鄭樵『通志・氏族略』。
- 4 鄭樵『通志・氏族略』。
- 5 鄭樵『通志・氏族略』。
- 6 顧炎武『日知録・雜論・氏族』。



7 『国語・周語』。

8 『明史・卷一四三』。

9 『爾雅・絜親』。

10 『左伝・僖公二十三年』。

11 『国語・晋語』。

12 『国語・鄭語』。

13 『白虎通・姓名』。

14 『唐律・戸婚律』。

15 『大清律例・戸律』。

16 五服制は、中国古代の親等制度で、これは喪に服する等級を現わすのに用いられている。中国の古人は葬送儀礼にうるさく、人がこの世を去れば、家人と親族とはかならず規定にしたがつて、決められた期間、決められた喪服を着て服喪しなければならなかった。それは親等が近いほど重い喪服を着て、遠ければそれだけ軽くなった。喪服は主に五段階に分かれていたので、「五服制」と呼ばれる。

斬衰 (zhāncuī) : 五服中、最も重い喪服。衰同縗。その服はもつとも粗い麻布でできており、縫い込がない。孝心と哀切の気持ちをあらわすのである。服喪の期間は三年。凡そ子及び未婚の娘は父の為、承重の孫は祖父の為、妻は夫の為に服する。

齊衰 (qícūi) : 斬衰に次ぐ。喪服は粗い麻布でできているが縫い込むので齊衰という。服喪三年のものは父亡き後の母の死、嫁からみたしゅうとの死である。服喪一年のものは齊衰期といい、

孫が祖父母のため、夫が妻のためにする。五ヶ月のものは曾祖父母のために、三ヶ月のものは高祖父母のためにするのである。

大功 (dagong) : 熟麻布 (加工した麻布) でできていて、糸も斉衰よりは細いが、小功のものよりは粗い。服喪期間は九ヶ月である。従兄弟、未婚の従姉妹、嫁した姑、姉妹のため、嫁した娘は伯叔父、兄弟のため服する。

小功 (xiaogong) : 服は細い熟麻布でできている。服喪期間は五ヶ月。凡そ本宗の人は曾祖父母、伯叔祖父母、従伯叔父母、未婚の祖姑、従姑、嫁した従姉妹、兄弟の妻、再従兄弟及び嫁した再従姉妹などのため皆服する。

總麻 (zongma) : 五服のなかでもっとも軽い服。細い糸の麻布でできている。服喪期間は三ヶ月。凡そ本宗の人は高祖父母、曾伯叔祖父母、族伯叔父母、族兄弟及び未婚の族姉妹のため服する。

五服制は親族遠近の目印であって、扶養の義務の重さ、政治的榮譽の損得、法律上の懲罰の軽重、賦役の多さ、相続権などみなこれと関係しないものはなく、非常に重要な法律的価値と社会的意義を持っていた。

17 福尾猛市郎『日本家族制度史概説』、吉川弘文館 一九七七年版、第一頁。

18 滋賀秀三「家」、『中国文化叢書・第十卷・日本文化と中国』、大修館書店一九六八年版、第三五頁。

19 丰田武『日本の封建制』、吉川弘文館 一九八三年版、第一三三頁。

20 『宗竺遺訓』「次男・末子別家に申し渡し候時、末子に至り候ては、家名は越後屋と名乗り候とも、名字などは三井を名乗らざる儀、身持ちかたがたかえつてしかるべき筋もこれあるべく候」。

ジョン・G・ロバート『三井——日本における経済と政治の三百年』、ダイヤモンド社 一九七六年版、第四一四頁。

21 中庄家憲「当家に男子出産致すとも別家または養子に遣わすべし。それまでは召使い同様に使うべし。男子相続は後代まで永く永く決して相成らず。当家相続は養子に限り、堅く定め置くものなり」。島武史『家訓に学ぶ商人の成功学』、柏書房 一九八三年版、第一〇五頁。

22 湯沢雍彦「日本における養子縁組の統計的大勢」、『新しい家族』第三号、一九八三年。

23 香火は神仏に供える線香や蠟燭であり、ここでは跡取りの子孫を指す。

24 陳其南『婚姻、家族与社会』、允晨文化実業有限公司 一九八六年版、第一七頁。

25 王滬寧『当代中国村落文化——对中国社会现代化的一项探索』、上海人民出版社 一九九一年版、第四二三頁。

26 尹黎云『中国人的姓名与命名艺术』、中央民族学院出版社 一九九三年版、第六六頁。

27 同上。

28 徐建順ほか『命名——中国姓名文化的奥妙』、中国書店 一九九九年版、第八頁。

29 昭穆 中国古代の宗法制において、宗廟、墓地、或いは祭祀の際の長幼の序列。太祖を真ん中に置き、二、四、六世を左側に置いて「昭」とし、一、三、五世を右側に置いて「穆」とする。旧時に一般に宗族の輩分を指す。世代ごとに字輩を同じくする。その効用は、宗族内の長幼、親疎、遠近を区別することにある。

## 発表を終えて

私は、滞在期間の長短の違いはありますが、いままで日本に度々来ています。そして、今でも大変困るのは日本人の名前の読み方です。苗字は数が多い上に、珍姓奇姓にこと欠きません。おなじ漢字でもいく通りもの読み方があります。町を散歩している時いつも表札の前で足を止めて、苗字の読み方をあれこれ考えますが、これがなかなか答えが出てきません。中国人がよくいう「現象を通して本質を読む」と、苗字という単純な問題の背景に豊かな歴史と文化が隠れています。中日両国の苗字の違いはそれぞれの社会の家族制度と密接に関係しています。

数年前から私は所属先の南開大学日本研究センターで、日文研から寄贈された「日文研フォーラム」の報告書を読んでいました。読む度、大いに得るところがありました。その私が、今日このように壇に立って自分の研究して得たことをお話して、京都市民の方々と交流できたことはほんとうに光栄に存じます。日文研が私に尊い機会を与えてくださいましたので、文化香る古都京都市民のみなさまの精神的風格と高い教養を知ることができました。心からお礼申し上げます。私のつたない日本語の、未熟な発表がみなさまのなにかのお役に立てれば、本当に嬉しいことです。

一時間という短い発表ではありますが、関係された多くのみなさまの御配慮によるものです。この報告が上梓されるにあたり、とくにコメンテーターの笠谷和比古先生と研究協力課の皆様にご心からお礼申し上げます。



2001年季春



日文研フォーラム開催一覧

回	年 月 日	発 表 者・テ ー マ
1	62.10.12 (1987)	アレッサンドロ・バロータ (ピサ大学助教授) Alessandro VALOTA 「近代日本の社会移動に関する一、二の考察」
2	62.12.11 (1987)	エンゲルベルト・ヨリッセン (日文研客員助教授) Engerbert JORIßEN 「南蛮時代の文書の成立と南蛮学の発展」
③	63. 2.19 (1988)	リー A. トンプソン (大阪大学助手) Lee A. THOMPSON 「大相撲の近代化」
4	63. 4.19 (1988)	フォスコ・マライーニ (日文研客員教授) Fosco MARAINI 「庭園に見る東西文明のちがい」
⑤	63. 6.14 (1988)	宋 彙七 (慶北大学校師範大学副教授) SONG Whi Chil 「大塩平八郎研究の問題点」
6	63. 8. 9 (1988)	セップ・リンハルト (ウイーン大学教授) Sepp LINHART 「近世後期日本の遊び—拳を中心に—」
⑦	63.10.11 (1988)	スーザン J. ネイピア (テキサス大学助教授) Susan NAPIER 「近代日本小説における女性像—現実と幻想」
⑧	63.12.13 (1988)	ジェームズ C. ドビンズ (オベリン大学助教授) James C. DOBBINS 「仏教に生きた中世の女性—恵信尼の書簡」

⑨	元. 2.14 (1989)	巖 安生 (北京外国語学院日本語学部助教授) YAN An Sheng 「中国人留学生の見た明治日本」
⑩	元. 4.11 (1989)	劉 敬文 (遼寧大学日本研究所副所長) LIU Jingwen 「教育投資と日本の戦後経済高度成長」
⑪	元. 5. 9 (1989)	スザンヌ・ゲイ (オベリン大学助教授) Suzanne GAY 「中世京都における土倉酒屋—都市社会の自由とその限界—」
⑫	元. 6.13 (1989)	夏 剛 (京都工芸繊維大学助教授) HSIA Gang 「インタビュー・ノンフィクションの可能性—猪瀬直樹著『日本凡人伝』を手掛かりに—」
⑬	元. 7.11 (1989)	エルンスト・ロコバント (東洋大学助教授) Erinst LOKOWANDT 「国家神道を考える」
⑭	元. 8. 8 (1989)	キム・レーホ (ソ連科学アカデミー・世界文学研究所教授) KIM Rekho 「近代日本文学研究の問題点」
⑮	元. 9.12 (1989)	ハルトムート O. ローターモンド (フランス国立高等研究院教授) Hartmut O. ROTERMUND 「江戸末期における疫病神と疱瘡絵の諸問題」
⑯	元.10. 3 (1989)	汪 向榮 (中国中日関係史研究会常務理事・日文研客員教授) WANG Xiang-rong 「弥生時期日本に来た中国人」
⑰	元.11.14 (1989)	ジェフリー・ブロードベント (ミネソタ大学助教授) Jeffrey BROADBENT 「地域開発政策決定過程を通してみた日米社会構造の比較」

⑮	元.12.12 (1989)	エリック・セズレ (フランス国立科学研究所助教授) Eric SEIZELET 「日本の国際化の展望と外国人労働者問題」
⑯	2. 1. 9 (1990)	スミエ・ジョーンズ (インディア大学準教授) Sumie JONES 「レトリックとしての江戸」
⑰	2. 2.13 (1990)	カール・ベッカー (筑波大学哲学思想学系外国人教師) Carl BECKER 「往生—日本の来生観と尊厳死の倫理」
⑱	2. 4.10 (1990)	グラント K. グッドマン (カンザス大学教授・日文研客員教授) Grant K. GOODMAN 「忘れられた兵士—戦争中の日本に於けるインド留学生」
22	2. 5. 8 (1990)	イアン・ヒデオ・リービ (スタンフォード大学準教授・日文研客員助教授) Ian Hideo LEVY 「柿本人麿と日本文学における『独創性』について」
23	2. 6.12 (1990)	リヴィア・モネ (ミネソタ州立大学助教授) Livia MONNET 「村上春樹：神話の解体」
⑳	2. 7.10 (1990)	李 国棟 (北京連合大学外国語師範学院日本語学部講師) LI Guodong 「魯迅の悲劇と漱石の悲劇—文化伝統からの一考察—」
㉑	2. 9.11 (1990)	馬 興国 (遼寧大学日本研究所副所長・日文研客員助教授) MA Xing-guo 「正月の風俗—中国と日本」
㉒	2.10. 9 (1990)	ケネス・クラフト (リーハイ大学助教授) Kenneth KRAFT 「現代日本における仏教と社会活動」



27	2.11.13 (1990)	アハマド M. ファトヒ (カイロ大学講師) Ahmed M. FATTHY 「義経文学とエジプトのペーバルス王伝説における主従関係の比較」
②⑧	3. 1. 8 (1991)	カレル・フィアラ (カレル大学日本学科長・日文研客員助教授) Karel FIALA 「言語学からみた『平家物語・巻一』の成立過程」
②⑨	3. 2.12 (1991)	アレクサンドル A. ドーリン (ソ連科学アカデミー東洋学研究所上級研究員) Aleksandr A. DOLIN 「ソビエットの日本文学翻訳事情—古典から近代まで—」
30	3. 3. 5 (1991)	ウイーベ P. カウテルト (ワーゲニンゲン大学研究員) Wybe P. KUITERT 「バロック・ヨーロッパの日本庭園情報—ゲオルグ・マイステルの旅—」
③①	3. 4. 9 (1991)	ミコワイ・メラノビッチ (ワルシャワ大学教授・日文研客員教授) Mikotaj MELANOWICZ 「ポーランドにおける谷崎潤一郎文学」
32	3. 5.14 (1991)	ベアトリス M. ボダルト・ベイリー (オーストラリア国立大学リサーチフェロー・日文研客員助教授) Beatrice M. BODART-BAILEY 「三百年前の京都—ケンペルの上洛記録」
③③	3. 6.11 (1991)	サトヤ B. ワルマ (ジャワハルラール・ネール大学教授・日文研客員教授) Satya B. VERMA 「インドにおける俳句」
34	3. 7. 9 (1991)	ユルゲン・ベルント(フンボルト大学教授・日文研客員教授) Jürgen BERNDT 「ドイツ統合とベルリンにおける森鷗外記念館」

③⑤	3. 9.10 (1991)	ドナルド M. シーキンス (琉球大学助教授) Donald M. SEEKINS 「忘れられたアジアの片隅—50年間の日本とビルマの関係」
③⑥	3.10. 8 (1991)	王 曉平 (天津師範大学助教授・日文研客員助教授) WANG Xiao Ping 「中国詩歌における日本人のイメージ」
③⑦	3.11.12 (1991)	辛 容泰 (東国大学校文科大学教授・日文研来訪研究員) SHIN Yong-tae 「日本語の起源 —日本語・韓国語・甲骨文字との脈絡を探る—」
③⑧	3.12.10 (1991)	洪 潤植 (東国大学校教授) HONG Yoon Sik 「古代日本佛教における韓国佛教の役割」
③⑨	4. 1.14 (1992)	サウイトリ・ウィシュワナタン (デリー大学教授・日文研客員教授) Savitri VISHWANATHAN 「インドは日本から遠い国か?—第二次大戦後の 国際情勢と日本のインド観の変遷—」
40	4. 3.10 (1992)	ジャン＝ジャック・オリガス (フランス国立東洋言語文化研究所教授) Jean-Jacques ORIGAS 「正岡子規と明治の随筆」
④①	4. 4.14 (1992)	リブシェ・ボハーチコヴァー (プラハ国立博物館日本美術 元キュレーター・日文研客員教授) Libuše BOHÁČKOVÁ 「チェコスロバキアにおける日本美術」
42	4. 5.12 (1992)	ポール・マッカーシー (駿河台大学教授) Paul McCARTHY 「谷崎文学の『読み』と翻訳：アメリカにおける 最近の傾向」

43	4. 6. 9 (1992)	G. カメロン・ハーストⅢ(ニューヨーク市立大学リーマン 広島校学長・カンザス大学東アジア研究所長) G. Cameron HURST Ⅲ 「兵法から武芸へ―徳川時代における武芸の発達―」
44	4. 7.14 (1992)	杉本 良夫 (オーストラリア・ラトロブ大学教授) Yoshio SUGIMOTO 「オーストラリアから見た日本社会」
④⑤	4. 9. 8 (1992)	王 勇 (杭州大学日本文化研究センター教授・日文研客 員助教授) WANG Yong 「中国における聖徳太子」
④⑥	4.10.13 (1992)	李 栄九 (大韓民国中央大学教授・日文研客員教授) LEE Young Gu 「直観と芭蕉の俳句」
④⑦	4.11.10 (1992)	ウィリアム D. ジョンストン (米国・ウェスリアン大学助教授・日文研客員助教授) William D. JOHNSTON 「日本疾病史考―『黴毒』の医学的・文化的概念の形成」
④⑧	4.12. 8 (1992)	マノジュ L. シュレスタ (甲南大学経営学部講師) Manoj L. SHRESTHA 「アジアにおける日系企業の戦略転換 ―技術移転をめぐる―」
④⑨	5. 1.12 (1993)	朴 正義 (圓光大学校師範大学副教授・日文研来訪研究員) PARK Jung-Wei 「キリスト教受容における日韓比較」
50	5. 2. 9 (1993)	マーティン・コルカット (米国・プリンストン大学教授・日文研客員教授) Martin COLLCUTT 「伝説と歴史の間―北條政子と宗教」

⑤①	5. 3. 9 (1993)	清水 義明 (米国・プリンストン大学マーカンド荣誉教授) Yoshiaki SHIMIZU 「チャールズ L. フリアー (1854～1919) とフリアー美術館 —米国の日本美術コレクションの一例として—」
⑤②	5. 4.13 (1993)	金 春美 (高麗大学校教授・日文研来訪研究員) KIM Choon Mie 「日本近代知識人の思想と実践—有島武郎の場合—」
53	5. 5.11 (1993)	タキエ・スギヤマ・リブラ (ハワイ大学教授) Takie SUGIYAMA LEBRA 「皇太子妃選択の象徴性 —旧身分文化との関連を中心として—」
54	5. 6. 8 (1993)	姜 希雄 (ハワイ大学教授・日文研客員教授) H. W. KANG 「変革と選択：10世紀の日本と朝鮮 —科举制度をめぐって—」
⑤⑤	5. 7.13 (1993)	ツベタナ・クリステワ (ソフィア大学教授・日文研客員教授) Tzvetana KRISTEVA 「涙の語り—平安朝文学の特質—」
⑤⑥	5. 9.14 (1993)	金 容雲 (漢陽大学教授・日文研客員教授) KIM Yong-Woon 「和算と韓算を通してみた日韓文化比較」
⑤⑦	5.10.12 (1993)	オロフ G. リディン (コペンハーゲン大学教授・日文研客員教授) Olof G. LIDIN 「徳川時代思想における荻生徂徠」
⑤⑧	5.11. 9 (1993)	マヤ・ミルシンスキー (スロベニア・リュブリアナ大学助教授・日文研客員助教授) Maja MILČINSKI 「無常観の東西比較」

59	5.12.14 (1993)	ウィリー・ヴァンドゥワラ (ベルギー・ルーヴァン・カトリック大学教授・日文研客員教授) Willy VANDE WALLE 「日本・ベルギー文化交流史—南蛮美術から洋学まで—」
60	6. 1.18 (1994)	J. マーティン・ホルマン (ミシガン州立大学連合日本センター所長) J. Martin HOLMAN 「自然と偽作—井上靖文学における『陰謀』—」
61	6. 2. 8 (1994)	マイヤ・ゲラシモア (ロシア科学アカデミー東洋学研究所研究員) Maya GERASIMOVA 「外から見た日本文化と日本文学 —俳句の可能性を中心に—」
62	6. 3. 8 (1994)	オギュスタン・ベルク (フランス・社会科学高等研究院教授・日文研客員教授) Augustin BERQUE 「和辻哲郎の風土論の現代性」
⑥3	6. 4.12 (1994)	リチャード・トランス (オハイオ州立大学助教授) Richard TORRANCE 「出雲地方に於ける読み書き能力と現代文学、1880～1930」
64	6. 5.10 (1994)	シルバーノ D. マヒウォ (フィリピン大学アジア・センター準教授) Sylvano D. MAHIWO 「フィリピンにおける日本現状紹介の諸問題」
65	6. 6.14 (1994)	劉 建輝 (中国・南開大学副教授・日文研客員助教授) LIU Jian Hui 「『魔都』体験—文学における日本人と上海」
66	6. 7.12 (1994)	チャールズ J. クイン (オハイオ州立大学準教授・東北大学客員教授) Charles J. QUINN 「私の日本語発見—王朝文を中心に—」

67	6. 9.13 (1994)	フランソワ・マセ (フランス国立東洋言語文化研究所教授・日文研客員教授) François MACÉ 「幻の行列—秀吉の葬送儀礼—」
⑥8	6.11.15 (1994)	賈 蕙萱 (北京大学助教授・日文研客員助教授) JIA Hui-xuan 「中日比較食文化論—健康的飲食法の研究—」
69	6.12.20 (1994)	彭 飛 (日本学術振興会特別研究員) PENG Fei 「日本語の表現からみた—異文化摩擦のメカニズム—」
⑦0	7. 1.10 (1995)	ミハイル・ウスペンスキー (エルミタージュ美術館学芸員・日文研客員助教授) Michail V. USPENSKY 「根付—ロシア・エルミタージュ美術館のコレクション を中心に—」
⑦1	7. 2.14 (1995)	嚴 紹盪 (北京大学教授・日文研客員教授) YAN Shao Dang 「記紀神話における二神創世の形態—東アジア文化とのか かわり—」
⑦2	7. 3.14 (1995)	王 家驊 (中国・南開大学教授・日文研客員教授) WANG Jiahua 「渋沢栄一の『論語算盤説』と日本的な資本主義精神」
⑦3	7. 4.11 (1995)	アリソン・トキタ (オーストラリア・モナシュ大学助教授・日文研客員助教授) Alison TOKITA 「日本伝統音楽における語り物の系譜—旋律型を中心に—」

⑦4	7. 5. 9 (1995)	リュドミーラ・エルマコーワ (ロシア科学アカデミー東洋学研究所極東文学課長) Lioudmila ERMAKOVA 「和歌の起源—神話と歴史—」
75	7. 6. 6 (1995)	パトリシア・フィスター (日文研客員助教授) Patricia FISTER 「近世日本の女性画家たち」
76	7. 7.25 (1995)	崔 吉城 (広島大学総合科学部教授) CHOI Kil-Sung 「『恨』の日韓比較の一考察」
⑦7	7. 9.26 (1995)	蘇 徳昌 (奈良大学教養部教授) SU Dechang 「日中の敬語表現」
⑦8	7.10.17 (1995)	李 均洋 (西北大学副教授・日文研来訪研究員) LI Jun Yang 「雷神思想の源流と展開—日・中比較文化考—」
79	7.11.28 (1995)	ウィリアム・サモニデス (カンザス大学助教授・日文研客員助教授) William SAMONIDES 「豊臣秀吉と高台寺の美術」
⑧0	7.12.19 (1995)	タチヤーナ L. ソコロワ=デリューチナ (翻訳家・日文研来訪研究員) Tatyana L. SOKOLOVA-DELYUSINA 「俳句の国際性—西欧の俳句についての一考察—」
81	8. 1.16 (1996)	ジョン・クラーク (シドニー大学助教授・日文研客員助教授) John CLARK 「日本の近代性とアジア：絵画の場合」

⑧2	8. 2.13 (1996)	ジェイ・ルービン (ハーバード大学教授・日文研客員教授) Jay RUBIN 「京の雪、能の雪」
83	8. 3.12 (1996)	イザベル・シャリエ (神戸大学国際文化学部外国人教師) Isabelle CHARRIER 「日本近代美術史の成立—近代批評における新語—」
⑧4	8. 4.16 (1996)	リース・モートン (ニューキャッスル大学教授・日文研客員教授) Leith MORTON 「日本近代文芸におけるゴシック風小説」
⑧5	8. 5.28 (1996)	マーク・コウディ・ポールトン (ヴィクトリア大学助教授・日文研客員助教授) Mark Cody POULTON 「能における『草木成仏』の意味」
⑧6	8. 6.11 (1996)	フランシスコ・ハビエル・タブレロ (慶應義塾大学訪問講師) Francisco Javier TABLERO 「社会的構築物としての相撲」
87	8. 7.30 (1996)	シルヴァン・ギニヤール (大阪学院大学助教授) Sylvain GUIGNARD 「筑前琵琶—文化を語る楽器」
88	8. 9.10 (1996)	ハーバート E. プルチョウ (カリフォルニア大学ロサンゼルス校教授・日文研客員教授) Herbert E. PLUTSCHOW 「怨霊の領域」
⑧9	8.10. 1 (1996)	王 秀文 (中国・東北民族学院助教授・日文研客員助教授) WANG Xiu-wen 「シャクシ・女・魂 —日本におけるシャクシにまつわる民間信仰—」



90	8.11.26 (1996)	王 宝平 (中国・杭州大学日本文化研究所副所長・日文研 客員助教授) WANG Bao Ping 「明治期に来日した中国人の外交官たちと日本」
⑨1	8.12.17 (1996)	陳 生保 (中国・上海外国語大学教授・日文研客員教授) CHEN Shen Bao 「中国語の中の日本語」
⑨2	9. 1.21 (1997)	アレキサンダー N. メシエリャコフ (ロシア科学アカデミー東洋学研究所教授・日文研来訪 研究員) Alexander N. MESHCHERYAKOV 「奈良時代の文化と情報」
93	9. 2.18 (1997)	郭 永喆 (韓国・漢陽大学文科大学長・日文研客員教授) KWAK Young-Cheol 「言語から見た日本」
94	9. 3.18 (1997)	マリア・ロドリゲス・デル・アリサル (スペイン・マドリ ード国立外国語学校助教授・日本学研究所所長) Maria RODRIGUEZ DEL ALISAL 「弁当と日本文化」
⑨5	9. 4.15 (1997)	ミケーレ・マルラ (カリフォルニア大学ロサンゼルス校準 教授・日文研客員助教授) Michele F. MARRA 「弱き思惟—解釈学の未来を見ながら」
⑨6	9. 5.13 (1997)	デニス・ヒロタ (京都浄土真宗翻訳シリーズ主任翻訳家 バークレー仏教研究所準教授) Dennis HIROTA 「日本浄土思想と言葉 —なぜ一遍が和歌を作って、親鸞が作らなかったか」
⑨7	9. 6.10 (1997)	ヤン・シコラ (チェコ・カレル大学助教授・日文研客員助教授) Jan SYKORA 「近世商人の世界—三井高房『町人考見録』を中心に—」

98	9. 7. 8 (1997)	鶴田 欣也 (カナダ・ブリティッシュコロンビア大学教授・日文研客員教授) Kinya TSURUTA 「向こう側の文学—近代からの再生—」
99	9. 9. 9 (1997)	ポーリン・ケント (龍谷大学助教授) Pauline KENT 「『菊と刀』のうら話」
100	9.10.14 (1997)	セオドア・ウィリアム・ゲーセン (カナダ・ヨーク大学準教授・日文研客員助教授) Theodore William GOOSSEN 「『日本文学』とは何か—21世紀に向かって」
101	9.11.11 (1997)	金 禹昌 KIM Uchang (韓国・高麗大学校文科大学教授・日文研客員教授) リヴィア・モネ Livia MONNET (カナダ・モントリオール大学準教授・日文研来訪研究員) カール・モスク Carl MOSK (カナダ・ヴィクトリア大学教授・日文研客員教授) ヤン・シコラ Jan SYKORA (チェコ・カレル大学助教授・日文研客員助教授) 鶴田欣也 Kinya TSURUTA (カナダ・ブリティッシュコロンビア大学教授・日文研客員教授) パネルディスカッション 「日本および日本人—外からのまなざし」
102	9.12. 9 (1997)	ジョナ・サルズ (龍谷大学助教授) Jonah SALZ 「猿から尼まで—狂言役者の修業」
103	10. 1.13 (1998)	姜 信杓 (韓国・仁済大学校人文社会科学研究所教授・日文研客員教授) KANG Shin-pyo 「京都考見録：韓国文化人類学者の経験」

104	10. 2.10 (1998)	高 文漢 (中国・山東大学教授・日文研客員教授) GAO Wenhan 「中世禪林の異端者——休宗純とその文学」
105	10. 3. 3 (1998)	シュテファン・カイザー (筑波大学教授) Stefan KAISER 「和魂漢才、和魂洋才——語彙・表記に見る日本文化の特性」
106	10. 4. 7 (1998)	スミエ・ジョーンズ (米国・インディアナ大学教授・日文研客員教授) Sumie A. JONES 「幽霊と妖怪の江戸文学」
107	10. 5.19 (1998)	リヴィア・モネ (カナダ・モントリオール大学準教授・日文研来訪研究員) Livia MONNET 「映画と文学の間に——金井美恵子の小説における映画的身体」
108	10. 6. 9 (1998)	島崎 博 (カナダ・レスブリッジ大学教授・日文研客員教授) Hiroshi SHIMAZAKI 「化粧の文化地理」
109	10. 7.14 (1998)	丘 培培 (米国・バツサー大学助教授・日文研来訪研究員) Peipei QIU 「なぜ荘子の胡蝶は俳諧の世界に飛ぶのか ——詩的イメージとしての典故——」
110	10. 9. 8 (1998)	ブルーノ・リーネル (スイス・チューリッヒ大学講師・ユング派精神分析家・ 日文研客員助教授) Bruno RHYNER 「日本の教育がかかえる問題点」

⑪	10.10. 6 (1998)	アハマド・ムハマド・ファトヒ・モスタファ (エジプト・カイロ大学講師・日文研客員助教授) Ahmed M. F. MOSTAFA 「『愛玩』—安岡章太郎の『戦後』のはじまり」
⑫	10.11.10 (1998)	アリソン・トキタ (オーストラリア・モナシュ大学助教授・日文研客員助教授) Alison McQUEEN-TOKITA 「『道行き』と日本文化—芸能を中心に」
113	10.12. 8 (1998)	グレン・フック (英国・シェフィールド大学教授・東京大学客員教授) Glenn HOOK 「地域主義の台頭と東アジアにおける日本の役割」
⑭	11. 1.12 (1999)	杜 勤 (中国・華東師範大学助教授・華東師範大学外国語学院 第2学部副学部長・日文研客員助教授) DU Qin 「『中』のシンボリズムについて—一宇宙論からのアプローチ」
115	11. 2. 9 (1999)	シーラ・スミス (米国・ボストン大学助教授・日文研客員助教授) Sheila SMITH 「日本の民主主義—沖縄からの挑戦」
⑮	11. 3.16 (1999)	エドウィン A. クランストン (米国・ハーバード大学教授・日文研客員教授) Edwin A. CRANSTON 「うたの色々：翻訳は詩歌の詩化または死化？」
⑯	11. 4.13 (1999)	ウィリアム J. タイラー (米国・オハイオ州立大学助教授・日文研客員助教授) William J. TYLER 「石川淳著『黄金傳説』その他の翻訳について」

⑪⑧	11. 5.11 (1999)	金 知見 (韓国・仏教教育大学大学院長・日文研客員教授) KIM Ji Kyun 「内藤湖南先生の眞蹟—高麗太祖顯陵詩」
119	11. 6. 8 (1999)	マリア・ヴォイヴォディッチ (モンテネグロ共和国政府民営化推進部外資担当課長・ 日文研客員助教授) Marija VOJVODIC 「言葉いろいろ—日本の言葉に反映された文化の特徴」
⑫⑩	11. 7.13 (1999)	リース・幸子 滝 (米国・ケドレン精神衛生センター箱庭療法トレーニング コンサルタント・日文研客員助教授) REECE Sachiko Taki 「心理臨床の場に映った私生活の中の暴力と社会の中の暴力」
⑫⑪	11. 9. 7 (1999)	宋 敏 (韓国・国民大学校文化大学学長・日文研客員教授) SONG Min 「明治初期における朝鮮修信使の日本見聞」
122	11.10.12 (1999)	ジャン・ノエル・ロベール (フランス・パリ国立高等研究院教授・日文研客員教授) Jean-Noel A. ROBERT 「二十一世紀の漢文—死語の将来—」
⑫③	11.11.16 (1999)	ヴラディスラフ・ニカノロヴィッチ・ゴレグリアード (ロシア科学アカデミー東洋学研究所サンクトペテルブル ク支部極東部長・日文研客員教授) Vladislav Nikanorovich GOREGLIAD 「鎖国時代のロシアにおける日本水夫たち」
⑫④	11.12.14 (1999)	楊 曉捷 (カナダ・カルガリー大学準教授・日文研客員助教授) X. Jie YANG 「鬼のいる光景—絵巻『長谷雄草紙』を読む—」

⑫⑤	12. 1.11 (2000)	エミリア・ガデレワ (日文研中核的研究機関研究員) Emilia GADELEVA 「年末・年始の聖なる夜 —西欧と日本の年末・年始の行事の比較的研究」
⑫⑥	12. 2. 8 (2000)	李 応寿 (韓国・世宗大学校副教授・日文研客員助教授) LEE Eung Soo 「東アジア獅子舞の系譜—五色獅子を中心に—」
127	12. 3.14 (2000)	アンナ・マリア・トレーンハルト (ドイツ・デュッセルドルフ大学教授・日文研客員教授) Anna Maria THRANHÄRDT 「皇室と日本赤十字社の始まり」
⑫⑧	12. 4.11 (2000)	ペッカ・コルホネン (フィンランド・ユワスクラ大学教授・日文研客員助教授) Pekka KORHONEN 「アジアの西の境」
129	12. 5. 9 (2000)	金 貞禮 (韓国・国立全南大学校副教授・日文研客員助教授) KIM Jeong-Rye 「五・七・五、日本と韓国」
⑬③	12. 6.13 (2000)	ケネス・リチャード (県立長崎シーボルト大学教授・日文研客員教授) Kenneth L. RICHARD 「出島—長崎—日本—世界 憧憬の旅 サダキチ・ハルトマン (1867—1944) と倉場富三郎 (1871—1945)」
131	12. 7.11 (2000)	リュドミラ・ホロドヴィッチ (ブルガリア・ソフィア大学助教授・日文研客員助教授) Lyudmila HOLODOVICH 「お盆と正教の五旬祭—比較的なアプローチ—」

132	12. 9.12 (2000)	マーク・メリ (国際日本文化研究センター外来研究員) Mark MELI 「『物のあはれ』 とは何なのか」
133	12.10.10 (2000)	リチャード・ルビンジャー (米国・インディアナ大学教授・日文研客員教授) Richard RUBINGER 「読み書きできなかったのは誰か—明治の日本」
134	12.11.14 (2000)	辛 容泰 (韓国・東国大学校日本学研究所研究員・日文研客員教授) SHIN Yong-tae 「日本語の『カゲ(光・蔭)』外—日本文化のルーツを探る—」
135	12.12.12 (2000)	蔡 敦達 (同済大学日本学研究所助教授・日文研客員教授) CAI Dun da 「中国文人が観た明治日本—旅行記を読む—」
136	13. 2. 6 (2000)	バルト・ガーンズ (国際日本文化研究センター中核的研究機関研究員) Bart GAENS 「長者の山—近世的経営の日欧比較—」
137	13. 3. 6 (2001)	ポール・グローナー (ヴァージニア大学教授・日文研客員教授) Paul S. GRONER 「仏教の戒律とは何か？」
138	13. 4.10 (2001)	李 卓 (南開大学教授・日文研客員教授) LI Zhuo 「中日姓名の比較について—親族の血縁性と社会性—」

139	13. 5. 8 (2001)	エッケハルト・マイ (ドイツ・フランクフルト大学教授・日文研客員教授) Ekkehard MAY 「西洋における俳句の新しい受容へ」
140	13. 6.12 (2001)	徐 蘇斌 (国際日本文化研究センター外国人研究員) XU Subin 「中国現代建築の成立基盤—留日建築家・趙冬日と人民大会堂—」

○は報告書既刊

なお、報告書の全文をホームページで見ることが出来ます。

<http://www.nichibun.ac.jp/dbase/forum.htm>





\*\*\*\*\*

発行日 2001年9月1日

編集発行 国際日本文化研究センター

京都市西京区御陵大枝山町3-2

電話 (075) 335-2048

ホームページ：<http://www.nichibun.ac.jp>

\*\*\*\*\*

© 2001 国際日本文化研究センター





■ 日時

2001年 4 月10日（火）

午後 2 時～ 4 時

■ 会場

国際交流基金 京都支部

# 第三回 中日姓名の比較について

—親族の血縁性と社会性—  
李卓

国際日本文化研究センター